

2011年7月1日発行(毎月1回1日発行第9巻) 第7号 通巻102号 2004年4月15日第二種郵便物認可

空手道マガジン


Japan Karatedo Fan

JK Fan

CHAMP

7 2011 VOL.102

個人形、世界3連覇のバルデシ
団体形世界3度優勝
イタリアチームの考えるKATAとは

 イタリアチーム

KATA 最強のNOWHOW

形チャンピオン育成のプロフェッショナル
長谷目秀久

消えたトマリ手! その歴史と真実

発掘 「純粋トマリ型」 奥義伝!

琉球伝「トマリ型」の神秘はあった。 沖縄拳法空手道 沖拳会師範 山城美智

世界に続く審判員の道

 武術とスポーツ科学の融合が世界王者を作る
G. Kotaka SPEED DRILL

ハイブリッド・ステップワーク大公開!

「サイドステップ × 瞬間脱力 = 最速」の法則



ウィーンの空手メンバー達（前列左著者）。

第16回【最終回】 ウィーン空手紀行

4月16日、「第36回オーストリア全国空手道大会」がシュタイヤマルク州のパート・ブルマウで開催された。肌の色は異なり、会話言語も異なるが、大会会場で行われている全ての事が日本でされている空手道大会とまったく同じ。日本にしているような不思議な感覚を覚えた。空手道に関しては世界が一つだということに改めて感じる事ができた。

大下正孝

トーマス医学博士が優勝

この大会において、トーマス医学博士（現45歳、ウィーン空手道クラブ会長、ウィーンさくら武道科学大学院学長）が、男子個人形35才以上の部で優勝した。この優勝は若者が現役の部で優勝するよりも意味のある勝利である。多くの役員や審判員がトーマス医学博士の勝利を称えに来ていた。

試合で演武した形は、1回戦ヘイクー、2回戦パイカー、3回戦アーナン、決勝戦チャタンヤラ・クーシャンクー。どの形も全て練習のプロセスを知って

いるだけに、彼の喜びが私の喜びでもあり自分の勝利以上に嬉しかった。1年間の努力がみごと実を結んだのである。

トーマス博士は空手道を始めて31年が経過している。若い時は組手や形でオーストリアの代表選手として世界大会でも活躍した。今も現役選手として活躍し、病院では外科の代表責任者として毎日のように外科手術を行っている。彼こそオーストリアを代表する文武両道の武道家である。トーマス医学博士の今後の活躍に期待したい。



トーマス医学博士の形演武。



女子団体形の分解演武。



左より、古武道優勝のミハエル、男子個人形優勝のトーマス医学博士、男子個人形準優勝のブンクティ副学長。



男子個人組手。

当校・副学長も準優勝

今年51歳になるブンクティ（会社経営者、ウィーン空手道クラブ副会長、ウィーンさくら武道科学大学院副学長）も男子個人形45歳以上の部で準優勝した。彼も非常に努力家で大会前、51歳とは思えない程の激しい練習を繰り返して、優勝を目指していた。優勝を逃したのは残念だが、決勝は3対2という、紙一重の結果だった。努力の成果を発揮できた試合内容だった。

この部で優勝したのは、同じく私達のメンバーで、今年63歳になるミハエルだった。彼も63歳とは思えない、パワーとスピードを兼ね備えた、理想の武道家である。

大会種目には古武道も

日本の公式戦と異なるのは、ここオーストリアでは空手道大会の種目の中に古武道があるということだ。男子個人の部と、女子個人の部があり、どの武器を使ってもよいということで、棒、杖（じょう）、ヌンチャク、サイ、トンファ、鎌など、それぞれの選手が数ある武器のいずれかを使い演武する。

日本でもある団体では古武道を種目として採用しているところがあるが、公式戦で採用しているのは面白いといえる。ヨーロッパの人達が古武道の武器を真剣に操っている姿はなんとも感慨深く、私達も見習いたいところである。

今回、男子の部で優勝したのは、二丁鎌を使った私達のメンバーで、男子個人形 45 歳以上の部でも優勝したミヒヤエルだった。

海外から見た日本の事情

以上が今回の大会報告であるが、私たちの仲間が結果を出してくれた事に一安心しているところだ。さて、最終回に当たって、“ヨーロッパから見た日本空手道界”ということを書かせていただきたい。

世界大会で戦う日本人選手を観て感じたのが、「投技」や「倒し技」に対して不慣れだということ。「投技・倒し技」を繰り返されて高得点を取られ敗北した印象が強い。逆に、「投技・倒し技」を仕掛け、功を奏した場合でも、投げ、または倒した後、すぐに技を決める事ができず、得点に結びつかなかったのが残念だ。これは日本選手がルールにおいて、世界に順応できていないというのが原因ではないだろうか。

ヨーロッパでもアメリカでも中東でも「世界空手道選手権大会」を目指す全ての人々は、世界空手連盟 (WKF) のルールを研究し、順応している。日本では危険、あるいは諸事情からか、各団体が団体独自のルールを採用していると思うのだが、世界で戦う場合は、これが不利となる。100 分の 1 秒、1000 分の 1 秒という、紙一重の世界で戦う選手にとって、ルールに順応できないのは致命的である。確かに「投技」は危険かもしれないが、その中で戦い、練習することが技術向上に繋がり、世界大会での勝利に結びつくのではないかと考える。

日本国内にあって、このルールに関して苦慮しているのが「全空連 (JKF)」であり、その指導の下、しっ

かりとルールや戦法を研究することが重要であり、各団体が強固な協力体制を作ることが必要だ。世界を目指すのであれば、ルールは常に一つでなければならぬ。

沖縄の「唐手」が日本の「空手道」になったように、「空手道」はもはや日本だけのものではない。世界で戦うには、世界のルールに順応し、対応していかなければ、勝ち目は薄くなる。現在、世界空手連盟の加盟国は 182 ヶ国ある。空手道発祥国としての心構えは持たなくてはならないが、世界にとって日本も 182 分の 1 であることを自覚しなければならないと思う。

皆さまに感謝

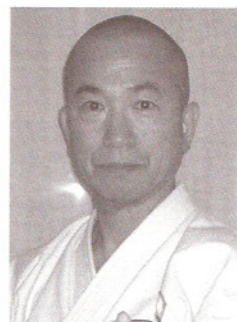
今回でこの「ウィーン空手紀行」は終了となります。私の記事を読んで下さった皆様に心から感謝致します。お励ましもいただきましたが、厳しい評価も成長の糧となりました。全てに感謝です。

ここウィーンで、私のやるべきこと、やらなければならないことはまだまだ山ほどあり、これからも努力は継続していくつもりです。人生は死を迎えるまで勉強ですから……。

機会があれば、ウィーンから新しい情報をお伝えする日があると思います。これからもよろしく願い致します。しばしの間、SAYONARA!

▶ 空手選手、空手道愛好家で、一度でも「英語」の必要を感じた人の必携参考書。『カモン・Japan!』で勉強をして世界に飛び立とう!

この書籍のお問合わせ・ご注文は (株) チャンプまで
TEL : 03-3315-3190 FAX : 03-3312-8207



■プロフィール
■プロフィール
1956年7月18日生まれ、54歳。
1979～1983年までアメリカに3年半
滞在し、軍隊や大学・高校で空手道を指導。
現在はウィーンに滞在し、空手道の指導を
行いながらウィーン大学大学院で博士号修
得を目指して勉強中。芦屋大学専任講師・
ウィーンさくら武道科学大学院准教授・
(財)全日本空手道連盟公認教士7段・糸
東流7段師範・日本体育協会上級コーチ・
剣道3段・居合道4段・日本拳法3段・柔
道2段・弓道初心者・合気道初心者。

『空手道英会話 カモン・ジャパン!』を著
し、空手英語の第一人者となる。